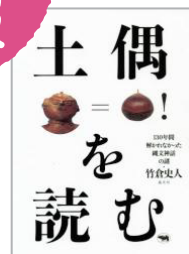




公民館図書室 今月のおすすめ



土偶を読む
竹蔵 史人 / 著
晶文社



日本外食全史
阿古 真理 / 編
亜紀書房



東京を捨てる
澤田 晃宏 / 著
中央公論新社



教養としての
日本地理
浅井 建爾 / 著
エクスナレッジ



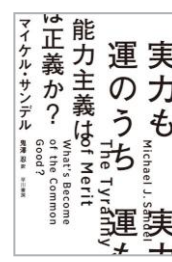
子どもが作る
弁当の日
城戸 久枝 / 著
文藝春秋



自転しながら
公転する
山本 文緒 / 著
新潮社



ミカンの味
チョ・ナムジュ / 著
朝日新聞出版



実力も運のうち
マイケル・サンデル / 著
早川書房



気候を操作する
杉山 昌広 / 著
KADOKAWA

大桑村公民館図書室（村民体育館 横）

開室時間 平日 9時～17時/18時～20時 休日 9時～17時

※ 18時以降に図書室を利用される場合、体育館窓口へお申し出ください。



生涯学習情報「まなびましよう」は大桑村のホームページにカラーで掲載しています。
掲載内容に関するお問合せは 大桑村教育委員会生涯学習係 0264-55-1020



村民体育館の利用について

村民体育館は新型コロナワクチン接種会場となるため、下記期間中は利用できません。ご理解ご協力をお願いします。

日程	7月 24日(土)、25日(日)、31日(土)
	8月 1日(日)、7日(土)、8日(日)、14日(土)、15日(日)、 21日(土)、22日(日)、28日(土)、29日(日)

大桑村歴史民俗資料館のイベント

『懐かしい大桑村 あの頃の写真展』

期間

開催中～
7月25日(日)
※月曜休館

時間

9時
～16時30分



昭和20年代から40年代頃の大桑村の風景・人々の様子と、当時の生活道具を展示しています。懐かしのあの風景・あの人に会えるかもしれません。来館の際に、往時の思い出を語ってください。

『第5回 とき 刻・思い さんにん展』

期間

7月31日(土)～8月8日(日)
※月曜休館

時間

9時～16時30分
※最終日は15時まで

岡田政晴・中畑勝美・中野智晃、蘇南高校15回生(昭和45年卒)同級生による作品展です。期間中は作者が在館します。

知ってる？ 郷土のヒト

持続可能な社会・SDGsという言葉をよく耳にします。特に「食」と「エネルギー」への関心が高まり、多くの地域で地産地消への取り組みが始まっています。

大正期、大桑村に一人の農政ジャーナリストが現れました。名前は古瀬伝蔵(ふるせ でんぞう)。「産業の基礎たる農業の重要性」を説き、現在もJAの機関誌として出版されている『家の光』を創刊し、また農業関係の出版社として定評のある農山漁村文化協会も創始しました。

このような人物が、大桑村出身だということは意外にも知られていません。「彼の残した業績や考え方を、光の部分も影の部分も合わせて学ぶことによって、これからの私たちの歩むべき方向を考えることができるのではないか。」そう考え、有志による古瀬伝蔵記念事業実行委員会が立ち上げられました。ご一緒に古瀬伝蔵の足跡、そしてこれからの農業の在り方を考えてみませんか。



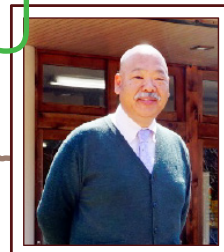
古瀬伝蔵
(1887-1959)

連絡先 古瀬伝蔵記念事業実行委員会 / 代表：古畑昌夫(55-2605)

図書館準備室便り



図書館長 平中和司



ホラー小説の帝王と呼ばれるスティーヴン・キングの作品に『ファイアスターター』というSFがあります。

秘密機関の実験で超能力を得てしまった父娘が、政府の追手から逃れる話なのですが、そのラストが印象的です。父親から「秘密機関の存在を明らかにすることが、助かるための唯一の方法だ。」と言われた主人公の少女は、最後に図書館に助けを求めます。

図書館のカウンターで少女は尋ねます。「政府と関係を持っていなくて、発行部数の多い雑誌はなんですか？」まさに生死にかかわる情報を図書館から得ようとするわけです。

この小説、後に『炎の少女チャーリー』という邦題で映画化されました。こちらは、当時大人気だった子役ドリュー・バリモアを主演に起用したのですが、原作ファンがアッと驚くようなトンデモ映画になっていました。

映画といえば、スリラー映画の巨匠アルフレッド・ヒッチコックの作品『疑惑の影』でも、図書館が登場します。叔父を連続殺人の犯人ではないかと疑った少女が、図書館で過去の事件を調べるという場面です。アメリカでは、わからないこと・知りたいことがあったら、調べるために図書館へ行く、ということが習慣になっているとか。



日本では、普通の人が日常的に「調べる」という習慣はあまりなかったようです。しかし、インターネットの発展やスマートフォンなどの普及によって、今日では誰でも日常的に「調べる」という行為を行っています。

では図書館はもういらないのか。とんでもありません、図書館員は一層高度な検索技術を習得し、さらには人脈をも駆使して情報集めています。「調べる」ことが日常になった今だからこそ、いっそう図書館の需要は高まっていると言えるのかもしれません。

ただ、日本のエンターテインメントでは自然な形で図書館が登場するようになるまでには至っていないのは、残念なところ です。